

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の1年目)

1. 研究課題

中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む

Chinese Laity's View of Buddhism: Reading the Expanded Collection of the Propagation of Light compiled by Daoxuan in the Tang

2. 研究代表者氏名

船山徹

Funayama Toru

3. 研究期間

2020年4月-2024年3月(1年目)

4. 研究目的

本研究班は、共同研究班「中国在家の教理と経典」の方法と成果に基づき、唐の道宣撰『広弘明集』に収める中国在家の著作から彼らの仏教観を検討する。四～七世紀頃の中国で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく文人等の在家信者が果たした役割も大きかった。出家者が学んだ経典や論書は現在の大蔵経の全貌を理解することから知られるが、一方、在家者の仏教知識がどの程度のものであったか、それは出家社の理解と相違する点があったのか、在家者に共通の得手不得手があったか等の問いに答えることは予想以上に難しく、現在に至るまで確かな答えは得られていない。人文研ではかつて六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、『肇論』『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣撰『広弘明集』(7世紀)を主な素材として中国在家仏教の実態解明を目ざす。

Based on the methodology and results conducted by "Buddhist Sutras and Doctrines for the Chinese Laity" (2016-20), this projects attempt to shed a new light on the acutal situation of Buddhist Laity in medieval China. As Chinese Buddhism underwent various developments between the fourth and seventh centuries, not only monastics but also laypeople played a large role. Although we can learn about the sutras and treatises studied by monastics through the entire Buddhist canon that is extant today, with regard to lay Buddhists, various questions remain unexpectedly difficult to answer, such as: To what extent did laypeople possess knowledge of

Buddhism? On what points was that knowledge similar to and different from the knowledge held by monastics? Were there any shared likes and dislikes of particular Buddhist scriptures and ideas among laypeople? Previous seminars held in this institute studied texts such as the Zhao lun and Hongming ji in order to understand the Buddhism of intellectuals and ordinary people during the Six Dynasties, Sui, and Tang periods. The present research seminar aims to continue this line of inquiry, taking as its main source text the Expanded Collection of the Propagation of Light (Guang hongming ji, 7th c.) - in which the compiler Daoxuan gathered the writings of many lay Buddhists - in order to clarify the real conditions of lay Buddhism in China.

5. 本年度の研究実施状況

昨年は、六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、唐の道宣撰『広弘明集』巻 26 に収める以下の文献を会読し、(1)漢語原典の校訂本・(2)現代日本語訳・(3)重要原語の語注を作成した。――南斉の周顒「與何胤書」、梁の武帝「斷殺絶宗廟犠牲詔」、顔之推「誠殺家訓」、梁武帝「斷酒肉文」。このうち南斉の周顒の書は、仏教では生き物を殺さないことを実践するので肉食してはいけないことを説く。梁の武帝の「斷殺絶宗廟犠牲詔」と同じく武帝の「断酒肉文」は、飲酒と肉食が過ちであることを、在家者である皇帝が出家者に説く内容である。その内容から、当時の出家者は男女を問わず肉食していたという実態を描き、武帝はあるべき仏教を実現すべく、肉食と飲酒の過から逃れる打開策を主張する。顔之推の文も基本的に同じ趣旨である。いずれも5～6世紀の在家仏教徒であるが、彼らにとって菜食主義は宗教観と生命観に根ざすものであることが様々な角度から説明されており、在家仏教観の大きな一面を浮き彫りにする資料として意義がある。今年度は梁の武帝「断酒肉文」の残りの部分を読了する。この文献は、内容も意義深い語彙の点からも6世紀前半の生きた語彙が見られ、仏教に関する制度史の資料ともなる。今年度の研究班回数は14回。

6. 本年度の研究実施内容

2020-05-29 会読：周顒「與何胤書」 発表者 船山徹
2020-06-19 会読：梁武帝「斷殺絶宗廟犠牲詔」 発表者 河上麻由子
2020-07-03 会読：顔之推「誠殺家訓」 発表者 中村慎之介
2020-09-18 会読：梁武帝「斷酒肉文」(1) 発表者 古勝隆一
2020-10-02 会読：梁武帝「斷酒肉文」(2) 発表者 魏 藝
2020-10-16 会読：梁武帝「斷酒肉文」(3) 発表者 趙ウニル
2020-10-30 会読：梁武帝「斷酒肉文」(4) 発表者 中西俊英
2020-11-20 会読：梁武帝「斷酒肉文」(5) 発表者 船山徹
2020-12-04 会読：梁武帝「斷酒肉文」(6) 発表者 久永昂央

- 2021-01-15 会読：梁武帝「斷酒肉文」(7) 発表者 倉本尚徳
 2020-01-29 会読：梁武帝「斷酒肉文」(8) 発表者 船山徹
 2020-02-19 会読：梁武帝「斷酒肉文」(9) 発表者 ウィッテルン Ch.
 2020-03-05 会読：梁武帝「斷酒肉文」(10) 発表者 河上麻由子

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

船山 徹、稲本 泰生、稲葉 穰、ウィッテルン、クリスティアン、古勝 隆一、中西 竜也、石垣 明貴杞、李 瑄

学内

趙ウニル(大学院文学研究科(非常勤講師))、中村 慎之介(文学研究科(院生))、上島 享(文学研究科)

学外

桐原 孝見(龍谷大学)、中西久味(新潟大学)、松岡寛子(仏教伝道教会)、村田みお(近畿大学)、中西 俊英(東大寺)、河上 麻由子(奈良女子大学)、山田 周(京都府立大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	7	1			1	91	13			13
国立大学	1	1		1			13		13		
公立大学											
私立大学	1	2	1	1		1	26		13		13
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1				13	13			
民間機関	1	2					26				
外国機関											
その他	1	1					13	13			
計	6	14	3	2	0	2	182	39	26	0	26
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
なし

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東方學報	1	R2. 12	『出要律儀』佚文に見る梁代佛教の音寫語	船山徹

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度と同じ手法によって、来年度も『広弘明集』に収める在家者が執筆した仏教書を取り上げ、漢語原典の校訂・現代日本語訳・語注を作成する会読を毎回行う。ただし次に『広弘明集』のどの箇所を取り上げるかは、本年度の会読が終了する3月に班員が集まって討論して決める予定である。とりあえず読むのが決まっている箇所は、『広弘明集』巻26の梁の武帝「断酒肉文」の最終部分（本年度に読み切れずに残る部分）である。

13. 次年度の経費
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果については、一度にすべてを公表するのではなく、会読したものの中から公開し易いものとして、まずは梁の武帝「断酒肉文」の原文校訂・現代語訳・語注を『東方學報』京都に掲載するつもりでいる。その後も、年次毎に『東方學報』に研究成果を公表する。さらに四年計画の二年目に当たる年として、一度、2021年度には前半2年に会読した箇所の内容を整理し、他の文献との内容的連携を解明する研究会をもちたいと考えている。